

墨牡丹

秦恒平

墨牡丹

秦恒平

集英社

墨 牡丹

昭和四十九年十二月五日 印刷
昭和四十九年十二月十五日 発行

定価八五〇円

著 者 秦 恒 平

装幀者 栃折久美子

発行者 陶 山 巖

発行所 株式会社 集英社

東京都千代田区一ツ橋二ノ五ノ十
郵便番号 一〇一

電話 二六五一六一一一

印刷所 大文堂印刷株式会社
落丁・乱丁本はお取り替えます

目次

一章	雪の日	5
二章	女の顔	38
三章	清姫	72
四章	説法	126
五章	富貴の花	187

墨
牡
丹

迪
子
に

一章 雪の日

一

土田は幾度でもちから任せに引いた。勢あまつて矢は大概的を外したが、稀に叩きつけるように星を射た。震一は思わず手を拍った。土田の元気が多少ねたましい。だが矢数を数えて的に当てたのは、結局いつも土田より震一の方が多いのだ。土田はことさら齒嚙みして口惜しがり、榊原も小野も呆れて震一を囃した。

「なんちゅお人やろナこのにいさんは」

晩花がいつか、「お多福さん」と蔭口を叩いた矢場のお福婆も、時たまお揃いで顔を見せる仲間のうち、一番弓の引きよりのへっぴり腰な震一の矢が、なぜかよろよろと山なりに届きそうに

もなくぼつんと的に当るのがおかしいと笑い崩れる。顔のわりに大きな黒縁のメガネの下で、震一は神経質そうに眼をしばたたき、黙ってにたにたするしかなかった。

「さ、行くで。晩花氏が待つとォるよ」

小野にせかれておうと土田が土間のガラス戸をあけた。寒気が絡むようにマントの裾を巻きこみ、外は雪になっていた。「せくな騒ぐな」と肩肘をはってみた榊原も「ああ寒^さぶ」と尻ごんでしまう。「早う」と、震一の背を手で押すほどに小野も一緒に外へ出は出たが、黒い衿巻の端を力まかせに握ったまま、祇園の杜から吹き降りに流されてくる雪の勢に、軒いっぱいの所で思わずたじろいでいた。

「えらい雪や。積ったらかなんな――。寒ぶ寒ぶ。すんまへん、しめまつせ」

お福婆につれなくガラス戸をしめ出され、もう客も来まいか針金一本に渡した汚れ布のカーテンがシャーンと引かれてしまうと、めっきり足もと心細く、つむじ風に狂い舞う雪の空が却ってほんのりと明るい。東隣の写真館はとうに灯を消し、新駒の既舎で寝そびれて足^あがく馬の気はいも怪しい。

風邪の癒りきらない震一はこのまま祇園石段下から人力をやとって、衣笠の家へ帰ってきた。が、今日画箋堂主人の宴席に、みなが顔を揃えたのもつねの饗応でなかった以上、あとの相

談を自分だけ抜けるというわけに行かない。それに、繩手のとり友を出てくれば、その足で東へまっすぐ辰巳稲荷の脇を通って、好都合に知恩院ちおんいん三門下へ抜けられるものを、「円山へまわって弓引こか」と、わざわざ仲間に辰巳橋を渡らせ祇園町を斜めに抜ける遠まわりをさせたのは、他でもない自分だった。

案の定土田は「オ、ようし」とすぐ乗気になった。知恩院黒門脇の崇泰院には、今日都合のつかなかった野長瀬晩花が彼らの帰りを待っていると、律義な小野が咄嗟に反対したのにも土田はまあまあと押しかぶせるように手を引っぱって、震一の「挑発」に応じた。榊原は土田の意を察したらしく、黙って白川を渡った。薄氷の張ったせせらぎにそれでも水草の黒い影が揺れ、宵過ぎた星月夜は鳴るように高い。風が舞うのか家並の迫った切通しの上を、雲が頻りに漂う影になって清水寺の方角へ流されて行く。と、ささぬ傘を片手に、急ぎ足の舞妓が角茶屋の蔭から小路に入ってきた。三寸もあるこっぼり（木履）に足袋が真白い。

「こんばんは」

震一が作り声で愛嬌をふりまくと、舞妓は白塗りのちいさな顔を隠しもせず、同じことばを愛想よく打ち返して男たちの中を通り抜けた。小野や榊原が奇声をあげて見送るのをやりすごし、土田は道なかに腕組みして舞妓のうしろ姿を眼で追っていた。色白で、えらの張った、そして眼

を細めて睨むようなその横顔を、震一は軽い反感とも対抗心ともつかぬ心地で眺めていた。

震一の場合違いな誘いに応じた土田や小野には、今度の企てにどうか震一を引き入れたい、加わってほしい、気があった。本科出では榊原紫峰が参加するにしても、土田がこの二、三年とくに敬意を払ってきたのは、自分とは年来の親友で同じ京都絵専の別科を出た小野竹喬以上に、本科卒業の華岳村上震一だった。三年前、新古美術品展に出た『夜桜之図』の、ところどころがあつて甘くて、そのくせ辛辣な情緒は、よっぽどの勉強家、でなければ天成助平の絵だと、土田は村上華岳の名前に眼を瞠ったまま、あの時、少々品のない嘆賞の声を小野の耳に囁いていた。卒業は同期ながら終いまで馴染まなかつた本科生と別科生に、やっと交流の氣運が生まれたのもあれ以来だった。

土田らは今度の企てに、華岳ととりわけ親しい本科出の入江波光もぜひ加わってほしかった。だが、一旗上げる式のことには頭から懷疑的な入江は、氣の良い小野竹喬など本氣で憤激してしまふほど、勧誘のさきざきで先手を打っては居所をくらます始末で、入江流に呼べば「シンチ」の村上震一が、いまだに言を左右にして新しい会の結成に首をたてに振らないのも、土田や小野は入江波光の入知恵と思つて苛立つし、やや年嵩の、だが仲間内で一番温厚な榊原は、同じ本科出身の震一や入江の腰の重いのを学校時代からの感情的な反塾氣質と思われたくなくて、板ばさ

みに氣を揉んでいた。

繩手の店で、鳥鍋を突つきながら画箋堂主人の山本源之助は、自分が会の事務はみな引受けますからと請合った。但し、金の工面はもつと手広く淨財を仰ぐよりない、内貴清兵衛、吉田忠三郎、東京の窪田氏、豊中の尼崎氏、神戸の土屋氏と、口々に名が挙がれば挙がるほど震一は憂鬱だった。現に画箋堂が介在しているように、ことが実現すれば別の画商とも何軒かは接触しなければならぬまい、自然画債も増えよう、そうまでして何をと、入江波光などはそれが土田麦僊や小野竹喬の世俗的野心の楯に過ぎないように震一の同人参加を引きとめ、彼の画才を大事に以前から支援してくれている松ヶ崎の内貴清兵衛も、震一が相談に出向いた時は、ただ「おやめやす」の一言だった。

だが麦僊は華岳に希望を捨てていない。つい先刻も、とどのつまりは、と言った口調で華岳は存外生真面目に、念押し氣味にこうも言ったのだ。

「すると何やな、あんたらが言わはるるように、もし会の目的がある程度達したなら、その上はいさぎよう会の活動もやめてええ。と、そういうわけやな——」

「もちろん、そや」

土田が大きく頷くと、震一は、持前の賢い印度人のような澄んだ眼を眼鏡の奥で光らせた。耳

の大きい奴っちゃなと土田は思い、榊原は、「シンチ」と「キンジ」は張合^{はりあ}うとると感じた。

「ほんまにやる分には、それだけの覚悟なしに済まんのや。会の趣旨からいうても、わけの分らん売り絵はよう描かんで。そやろ山本はん」

「いや、これはえらい言われようどすな」

画箋堂は如才なく頭をかいてみせた。彼は京都絵画専門学校を第一回で卒業したこの連中を時あつては宴席に呼び、接待の傍ら言葉巧みに席画を描かせて応分の手当をしていた。田舎から出てきた貧書生以来の土田や小野が、お蔭でずいぶん助けられてきたことはたしかだった――。

そして今、震一のどこを狙ったやら怪しげな矢は、やっぱり十本中ひよろひよると三つは的に当って麦僂と紫峰が二本、小野竹喬は一本も当らなかった。

「おい、崇泰院まで走るで」

げっと一瞬尻ごんだ。が、乱れ舞う牡丹雪の向うのとりと青い瓦斯燈の色に、心誘われ、そこは血氣盛んな土田も小野も、榊原の珍しく氣ばった提案を面白そうに合点した。

「ようし、やるで」

いきなり震一は足袋はだしになった。いかにも唐突だったが、すぐ麦僂が倣った。震一はそのまま雪の中へ飛び出してみたが、忽ち肩にマントをせり上げ首をすくめたいじけた恰好で、思わ

ず、みんなの失笑を買った。いっそきょとんとそんな仲間を不審顔に顧る震一の顔つきには、やがて三十になる世帯持ちと見えぬ、思いつめたような、だがとぼんとした愛嬌があった。

いもぼう（えび芋と棒鱈の煮物料理屋）の脇をかけ抜け、一気に知恩院三門の下まできた時は、小野も榊原も下駄の齒を雪に噛まれて足袋はだしだった。小柄な小野は、左手に脱いだ下駄を、右には衿巻を領巾のように振りまわしながら一等先を飛びはねる勢で走り、喘息もちの震一はとうに息をきらして、榊原からまだ十間以上遅れていた。三門は真黒な大屋根を胸高に一面の吹雪闇に展げ、白く光った松林越しにもう崇泰院の二階のめざす灯の色が見えていた。

「――乾盃か。やけ酒か」

息きれぎれな仲間を迎え入れ、待ちかねていた野長瀬は、端的な口をきいた。彼は腹に桐の蒔絵のある大きな角火鉢の横へ、背広姿の両膝を窮屈そうにぬっと延ばしていた。長髪を二つに分け、広い額やきれ長な目もとが憂鬱そうな、詩人ともいいう風情でいて、野長瀬晩花はおそらく仲間の誰より気散じな、淡泊な男だった。

「いや、酒拔きの話にしよ」

震一が薙ぎ払うように片手をあげた。小野は階下^{した}に下り、庫裡でもう一つ火鉢^{かき}に燗を盛って貰って、階段の途中から持ちきれないで大声で土田を呼んだ。

「さ、今晚は何とか決まりつけよやないか。華岳君だってそうやないですか、そういつまでも決心を渋ってちゃ、きみ自身困らはるでしようが」

東京育ちの晩花がいつもの奇妙な京言葉でいきなり押して出た。今晚のうちに震一の肚を決めさせる、そのための画箋堂経営の一席だったし、九時前には中井先生も見えろと、手筈は小野がつけていた。

震一もわざと土田らをじらす積りはない。文展に業を煮やす気もちも誰より強い。——去年、大正五年春過ぎた頃、震一は入江波光と一緒に三日間斑鳩の農家に泊めて貰い、法隆寺金堂の壁画を縮図してきた。その勉強を『阿弥陀三尊図』に纏めて、秋の第十回文展の特選を取った。当然今年は無鑑査であるべきなのに、前作以上の自信作が鑑別を強いられ、無残に落選した。小野竹喬の『郷土風景』も同じ憂き目をみていた。

それしきことは、だが彼らはとうに予期していた。かつてあんなに竹喬や麦偃が激賞してくれた『夜桜之図』も、文展ではあっさり落選していた、かと思うと、描いた当人もさほどと思わぬ絵が賞を取ったり褒状を貰ったりしている。不安定な文展での当落が本当に自分たちの力量の及ばぬせいなら仕方はないが、土田や小野や、当の震一にしても榊原にしても、いやほど習熟した四条派この方の、冷ややかな写生に徹した画面を巧みに作って持ち出せば賞にも褒状にもすぐ

手が届き、古画や西洋画の勉強を若々しい趣向と才気にまかせて、意欲的な新しい絵に仕上げて出すと、いともすげなく首を横に振られてきたのだ。

土田一人がまだしも文展の旧弊を幾分突貫して、京都の若手に麦僊ありと楯を突いてはきた。が、それも一進一退、二点出せば一つが賞の末席に連なつて一つは落選ということが繰返された。会場で、新聞雑誌で、好評噴々の自信作が、文展内部では本人に納得できる待遇を受けえなかった。

「とぼけてる」

それが麦僊はじめ華岳や竹喬、紫峰らが浴びせられる文展審査員多数派の決まり文句で、褒も貶も小堀鞆音らのそんな一言で終り、肚立たしいことに京都育ちの青年にこの東京言葉は、妙にいやらしく真意が掴みかねた。温和しい小野や榊原でさえ、揃つて文展に落選した自作をその足で開催中の院展に持ちこみ、横山大観らの鑑別を請うて堂々と入選展示されるような、文展の大家竹内栖鳳の塾生としては破門ものの蛮勇を敢てしてきたことがある。それほど文展に対する不信は根強かった。ただ然るべき作品発表の場が他になかった。

「村上、あの『白頭翁』はあれからどうした」

「煮いたったよ」

「破ったんと違たんか」

「煮いてしもて、まだ癩にさわって破ったつた」

根は負けず嫌いな震一は、妻が折良く取上げてしまわないと、文展で落とされた作品など惜しげなくすぐ煮てしまふ。絹に描いた顔料は熱湯で煮ればきれいに流れて、絹地はそのまま裁縫の役に立つのがめぐり合せだ。

「ええねン。俺のことは辛抱できるねン。それよか土田のあの今年の絵、なんであれが無賞や、俺はあれが憎いよ。どこやったかで清方先生は、土田の『春禽趁晴』こそまず以て第一等や書いたはった。うちのむずかしい先生かて、中井先生かて、口では言わはらんが、肚の中ではべたぼめや。それが何やね無賞やて。俺はええ。今度のあの絵、あれはあれだけのもんや。小野の絵エかて立派に入選してええもんやが、マ、それも今回辛抱するとして、土田のあの無賞は落選以上に恥かかされとるわ——そやろ」

震一がばちんと火鉢を平手で叩くと、麦饅は耳まで朱くなり、肩を怒らせて黙っていた。小野が何か言いかけ、榊原に眼顔で制められた。野長瀬も額に垂れた髪をかきあげただけで、火箸を一本使って何やら灰に字を書きながら、震一の息づかいが静まるのを待っていた。

「——それにしても入江波光は賢い奴っちゃないか、ちゃんとその辺読んだるもんやから、文展